トピックス

ホームカミング・デイの特別展について

井上　勝也（大学文学部教授）

昨年のホームカミング・デイ（十一月三日）に大学はハリス理化学館の常設展示室（Neesima Room）で特別展を行う計画をたてた。それは新島襄先生の母校アマースト・カレッジのジョンソン・チャペルにある先生の肖像画を借り出して展示することであった。

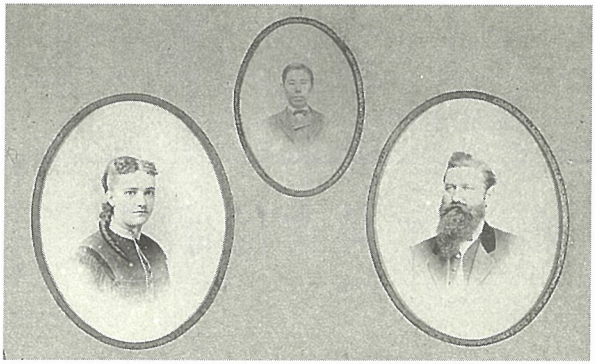
卒業生がアマースト・カレッジ詣でをする時に真っ先に向かう場所はジョンソン・チャペルに掲げられている新島先生の肖像画の前であろう。外国旅行が容易になったとはいえ、アマーストまで足を運ぶことができない卒業生のために、肖像画を里帰りさせる交渉を始めたのは、昨年三月に同カレッジを訪問された八田英二大学長である。特別展について法人部長会で報告された時、野本真也理事長からそれではワイルド・ローヴァー号の油絵も、ということになった。谷口宇平社史資料室長からこの話を聞いた私は、それならワイルド・ローヴァー号の油絵を所有しているチャタムの歴史協会に交渉して、テイラー船長の一族の組写真も同時に借り出してはどうかという話をし、結局前記三点の特別展が実現した。

私がテイラー家の組写真の借り出しを強く勧めた理由は、アマースト・カレッジ在学中の新島先生が一八六九年四月二十八日、テイラー船長の両親の金婚式に招かれ、集まった四十七人の組写真の中に、先生が船長夫妻に抱かれて息子のように写っているからである。これは当時子どものなかった夫妻に先生が家族の一員として扱われていることを示すもので、それを同志社関係者に見ていただきたかったからである。

一八六四年七月、テイラー船長は上海でベルリン号からワイルド・ローヴァー号に乗り移った新島先生を弟のように可愛いがり、英語や航海術を教え、ワイルド・ローヴァー号が翌年七月ボストンに着いて先生を船主A・ハーディー夫妻に紹介してくれた。このことが先生のその後の運命を決定づけることになったといえる。

先生は一八六六年以降六九年まで四回の夏をチャタムにあるテイラー船長の生家で過ごしている。先生はテイラー家の人々と共に馬車に乗って教会へ行き、近くの浜辺を歩きながら弁論の練習をし、森で黒イチゴを摘み、遠浅の海で蛤を拾い、鱈を釣る楽しい夏休みを過ごしたことを、私はミス・ヒドゥンやハーディー夫妻宛の手紙で知っていた。一八六九年五月十二日、先生はミス・ヒドゥン宛の手紙で前述のテイラー船長の両親の金婚式に招かれたことを絵入りで説明し、「私は彼らの家族の一員に数えられています」（『新島襄全集』6、p.51）と書

いている。そこで在外研究でアマーストに滞在中の私はその写真がきっとどこかにあるに違いないと考え、一九七七年九月、チャタムの歴史協会を訪れ、J・A・ニッカーソン氏に尋ねた。彼は私を資料の保管庫に案内し、これではないかと組写真の入った大きな額を示してくれた。それを外部に持ち出してよく見ると、



H.S.テイラー船長一族の写真の一部。新島先生がテイラー船長夫妻に抱かれるようにして写っている（グラビアページ参照）。

写真の真ん中に両親が写っており、右上にテイラー船長と夫人の間に挟まれて新島先生が写っているではないか。百年以上も保管庫に眠っていたと思われる埃をかぶった額が太陽のもとに引き出された時、新島先生が額から飛び出して来そうに思われた。私は発見の喜びで胸が一杯になった。

私は在外研究から帰国し、一九七八年七月刊行の『同志社時報』六四号のグラビアにこの組写真やそれまで判らなかったハーディー家のお墓の写真などを紹介した。今回同志社関係者に本物を見ていただく機会がやってきたことは嬉しい限りである。

さて、今回の特別展は樋口秀雄同志社アーモスト大学代表が肖像画の借用交渉に当たり、所管の田中憲次校友課長からの協力依頼を受けて、社史資料室の谷口、深川晃而、本井康博氏が全面的に協力した。そして九月に本井氏がアマースト・カレッジとチャタム歴史協会に赴き、三点の借り出しについて詳細な打ち合せを行った。その際これまで不明であった新島先生の肖像画の作者がボストンの肖像画家のA・E・スミスであることも判った。この肖像画はアマースト・カレッジの宝物であり、ワイルド・ローヴァー号の油絵は評価額五万ドルといわれる程の歴史協会にとっての宝物である。これらを無事借り出して展示し、無事返還するまでの二カ月間の苦労を校友課と社史資料室が引き受けた。輸送上や展示期間中配慮すべき多くの問題があった。幸い学内諸機関の理解と協力があり、展示室の防犯装置が格段に充実したことは今後のためにも大きな収穫である。一番喜ぶべきことはホームカミング・デイの一日に七百人を超える入館者があり、一カ月の特別展の期間中に普段の数倍の二千百人が入館し、深い感銘を与えたことである。ホームカミング・デイに色々な催しをすることは新島先生の「社員たるものは生徒ヲ鄭重ニ取扱ふ可き事」という遺言の具体化の一つである。今後も卒業生や在学生に配意した企画を進められることを望みたい。

(注) アマーストという表現を使うのは現在アメリカ史学会等でアマーストが定着しており、先生の母校名を正確に理解して貰いたいからである。（筆者）